

樹林緑化に対する公園利用者の評価と要望

～滝野公園における在来広葉樹種を用いた景観林育成に対する評価～

(社)北海道造園建設業協会

渡辺 修 ・ 孫田 敏

札幌開発建設部滝野すずらん丘陵公園事務所

篠宮章浩 ・ 山田了士

1. はじめに

国営滝野すずらん丘陵公園（以下、滝野公園）では、公園内ののり面の一部に在来の広葉樹種を用いて自然林を復元するような植栽（以下、在来種植栽林）を行なっている。昨年度の報告¹⁾で、この在来種植栽林を周辺自然林と比較し、樹木層についてはほぼ同等の種組成とサイズ構造になっていることを紹介した。このような在来種を用いた緑化は、近年多くの現場で取り組まれている²⁾。その意義として、自然生態系への負の影響の抑制と、より自然に近い景観・自然環境を市民に提供することが挙げられるが、コスト面や技術面での課題も多い（図1）。実施においては、その意義の優位性を社会的な要請の中に位置づけることが重要であり、方向性の決定や技術的課題の検討のためにも、市民・利用者による評価が必要となってくる。

今回の報告では、滝野公園の利用者に対して意識調査を行ない、樹林緑化に対する認識・要望について検討した。また滝野公園の在来種植栽林に対する景観的・生態的評価を明らかにし、今後の緑化において検討すべき課題についてまとめた。

2. 調査方法

調査は来園者の多い8月の週末の2日間に実施した（2001年8月18日と25日）。在来種植栽林に近い溪流園周辺に回答所を設置し、通行客や周辺で休んでいる来園者にアンケート用紙への記入を求めた。有効回答数は212名で、一部の回答者（52名）には植栽林・自然林の写真提示による聞き取り調査を行なった。

3. 結果

(1) 回答者の属性と公園の利用形態

対象者は、就学前の幼児を連れた若い夫婦やその家族が多く、女性が62%を占めた。居住地は札幌市とその近郊がほとんどを占めた。

来園目的は、調査地周辺の環境を反映して、散

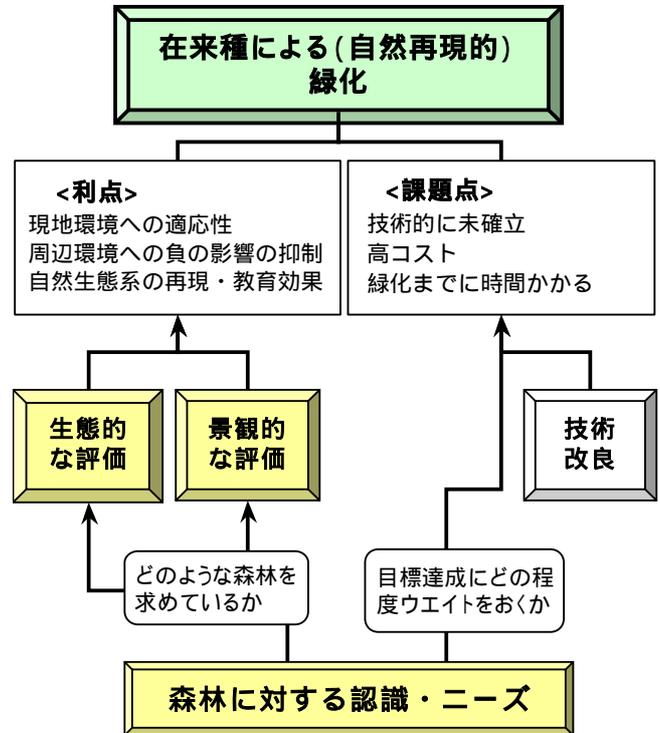


図1. 在来種による緑化の利点・課題点と森林に対する認識・ニーズ調査の位置づけ

歩散策 60%・水遊び 34%・森林浴 27%が多くを占めた。

(2) 森林景観への評価

6種類の自然林・植栽林の写真を提示して好みの森林についてたずねた。「第一印象で好きな森」としては、林床植生の少ない在来種植栽林が多く(33%)、針葉樹人工林が少なかった(2%)。林床植生の少ない在来種植栽林は「歩きたい森」としてももっとも多く選ばれていた。自然林が動物・草花などが多く確認されているという情報を与えた上で、再度「好きな森」を挙げてもらうと、自然林として紹介した写真の評価が上がり(15% 25%)、もっとも多くなった。

(3) 森林・森づくりへの認識と意向

「好きな森林」としては、「花がたくさん咲く森」52%・「大きな木のある森」43%・「動物が多く住む森」41%・「いろいろな種類の木がある森」32%の

回答が多く、花や動物・樹木などの森林の構成要素を重視している人が多かった。「整然としている森」23%・「冬も緑の森」8%・「同じ種類が揃った森」0.5%などの整備的な要素については回答率が低かった。

「森林の役割」については、「空気や水をきれいにする」83%・「生態系を保つ」62%・「野生動物のすみかとなる」53%などの評価が高く、木材資源的役割や防災的役割については評価が低かった。

森づくりの目標としては、「元の森の姿に近づくこと」42%・「動物が多くすめること」41%・「花がたくさん咲くこと」33%が多く挙げられた。これを因子分析によって2つの因子にまとめたところ、「手入れが行き届いていること」「見た目がきれいなこと」などと「元の森に近づくこと」が対置する「整備 - 自然復元」因子と、「動物が多くすめる」「花がたくさん咲く」「木の種類が多いこと」などで高い「多様性」因子とが取り出せた。

(4) 植栽・管理への意向

植栽林の管理方法への意向は「植栽してから自然にまかせる」が63%と最も多かった。植栽する木については、自生する樹木による復元を推進すべきだという回答が87%と非常に多く、その理由として「自然な状態が好ましい」75%が挙げられた。

このような自然復元を主眼とした在来種による森づくりを進める上では、緑化にかかる時間やコストが従来の手法よりもかかることが問題となるが、時間や費用よりも「目標に近づけること」を重視する人が多かった(66%)。

(5) 滝野公園の在来種植栽林への評価

在来種植栽林地を利用した人は28%と少なかったが、「きれいでよい」35%「静かでよい」30%といった肯定的な評価をしていた。写真提示設問では、自然に近い林として在来種植栽林を挙げた人が54%にのぼり、自然林として認識されていた。このような在来種を用いた森づくりに対しては否定的な評価は1%と少なく、「もっとすべき」という回答が84%あった。

4. 考察

(1) 森林景観に関する評価

自然林と人工林に対する嗜好性の比較は過去にも行なわれているが、一般市民は事実誤認が多く観念

的に自然林を嗜好するとされることが多い³⁾。すなわち、手入れをして整然とした森林を好むが、それを自然の森林だと思っており「自然のままがよい」と評価しているというものである。

しかし、今回の調査では、歩きやすさという評価と一致して、明るい広葉樹植林や自然林が嗜好されていた。動物・林床植物が多い自然林という情報を与えられると自然林への嗜好が高まっており、実際にふれることが前提である公園の森林への景観敵評価は観念的であるとは言えない。一方で針葉樹人工林は、対象地では十分な手入れがされていないためもあるが、景観的には否定的な評価で、「常緑性」についても評価が低く、公園利用者の視点では植栽意義が薄いと考えられる。

(2) 森づくりに対する利用者の評価と要望

森林に対する評価は、若年層を中心に生態的な観点が強く、森づくりに対しても自然性が重視され、元の姿に復元することを第一に求める声が多かった。したがって自然林により近づける手法を用いて、生育する「動物」「草花」といった要素を利用財として展開していくことが公園緑化として重要である。

実際の復元過程については、時間や費用よりも(復元という)目標が重視されていた。したがって、森づくりの上では、早期緑化などの即時的効果を重視するよりも、明確な目標設定を行ない、利用者に対してそのアピール・周知をしていくことが重要である。今回の対象地も周知が十分ではなかったが、看板・パンフレットなどによる目標と過程の紹介により、利用者の理解が十分に得られると期待される。

5. 参考文献

- 1)小松正明ほか(2001):滝野公園景観育成林調査報告第1報~植栽した広葉樹林の現状~,造園学会北海道支部大会発表要旨/会報,5.
- 2)倉本 宣ほか(2000):郷土種問題を考える.日本緑化工学会誌,26:84-100.
- 3)四手井綱英・林知己夫(1984):森林をみる心.254pp.共立出版.